

# ●モノグラフ小学生ナウ



子どもにとっての学級



Vol.2-5

1982.(株)福武書店 教育研究所/加藤智博・賀川雅子・阿部悦子  
豊能町立東ときわ台小学校教諭 湯井康二・奈良教育大学教授 深谷昌志

## 目次

**特**

**集**

### 学級集団の中での教師の役割 — 2

☆教師は密室の中の君主  
☆教育改革の動きと教師

調査レポート 子どもにとっての学級 ————— 6

要約と提言 ————— 6

**1. 学級に対する充足感** ————— 8

- 学級への満足度…………… 8
- 教師のタイプ…………… 10
- どんな学級か…………… 11

**2. 学級の学年差** ————— 15

- 4年生の学級と6年生の学級…………… 15
- 学級差を掘り下げる…………… 19

**3. まとめにかえて** ————— 24

シリーズ 子ども考現学(3) 女教師 ————— 25

- 全国小学校女教員会議…………… 25
- 女教員問題に関する調査…………… 26
- 境界人としての女教師…………… 27
- 子どもたちの目を信じて…………… 30

資料1・調査票見本 ————— 32

資料2・学年・性別集計表 ————— 40

特 集 学級集団の中での教師の役割

深谷昌志  
(奈良教育大学教授)



## 教師は密室の中の君主

始業式の日、担任の名前が発表されるたびに、子どもたちの間に悲喜こもごもの反応が広がる。歓声のあがる学級があれば、落胆の色をぬぐい得ない学級もある。

考えてみれば無理もない。その瞬間に、これから二年間の運命が決まってしまうからである。子どもたちは、好むと好まざるとに関わらず、その先生の許で、生活を送っていかねばならない。

改めて触れるまでもなく、子どもたちは、生まれてから成人するまで、さまざまな集団に帰属して成長していくが、それらを大別すると、

- ① 触れ合いをベースにした、人間関係の密度の濃い集団
- ② 特定の目的のために入る、人間関係の薄い集団

となる。前者としては家族や友だち仲間が、そして、後者には、熱やけいこごとが挙げられよう。

そして、学級は、こうした分類に従うと、②の性格が強い。つまり、学級とは本来教授—学習過程の展開を目指して、目的合理的に作られる第二次集団で、子どもたちは、参加の意志の有無に関係なく、どこかの学級のメンバーとなる。しかし、毎日何時間かの生活を送るうちに、教師と子ども、そして、子ども相互の間に、学級独自の雰囲気が生じ、「我々意識 (we feeling)」の持てる集団になる。そうした側面に着目すると、学級は人間的な絆の入り組んだ第一次集団の色彩が強いとも言える。特に、日本の学校では、伝統的に、学級王国的な感覚で、学級経営にあたる教師が少なくないので、そうした性格が増すと、学級が、家族的な雰囲気を漂わすこともあり得る。



したがって、学級は、制度的にみると、第二次集団だが、実質的には、子どもたちの生活拠点として、第一次集団的な意味を持った「準第一次集団 (quasi primary Group)」と言えよう。

なお、学級の中には、教師と子どもとの間の縦の関係と、子ども相互の横の関係が存在している。中でも、学級集団の特色は、教師が、絶対的な権威を持っている点で、教師は、知識や技術の伝達者、善悪の価値の判定者として、学級に君臨する。それだけに、学級集団の中で、教師の果たす機能は大きく、レヴィン (K. Lewin) の有名な研究によれば、教師の指導性の型が、専制型、自由放任型、民主型かによって、学級全体の雰囲気が左右されると言われる。また、ハーロック (E. B. Hurlock) は、賞罰についての教師の構え、つまり、叱責型か、賞讃型かなどもによって、学級の文化は影響されると指摘している。

いずれにせよ、学級という集団は、教師の指導のもとに子どもたちが業績 (achievement) を競い合うのを基本としているが、そうした合理性とは不分離の関係で、楽しみや悲しみをとともに分け持つ運命共同体的な性格をも備えている。

そして、学級という言葉に、ともすると、生活共同体的なイメージを抱くことが多い。たしかに、小西健二郎氏の『学級革命』、土田茂範氏の『村の一年生』、あるいは、東井義雄氏の『村を育てる学力』などの秀れた実践記録を読むと、子どもたちが、学級を生活の場として、生き生きと活動している様子が浮かんでくる。その他、齋藤喜博氏の『島小の授業』や、中学校の例になるが、無着成恭氏の『山びこ学校』についても、同じような印象を受ける。

たしかに、こうした実践例に限らず、多くの教師たちは、学級の子どもたちとの触れ合いを深め、そうした基盤の上に学習を進めようとしている。しかし、すべての教師が、子どもの中に飛び込んで、学習を展開しているわけでもない。特に、学級は、いわば、密室のような状況下であり、よほど逸脱した行為でもしない限り、教師の問題点が表面化することは少ない。

教室での教師は、子どもだけを相手にしているから、見方によれば、批判勢力を持たない専制君主に似ている。もっとも、君主が権力を顕にする機会がまれな、自制力のあるタイプなら子どもたちも幸せだが、不幸にして独裁者の君主に率いられると、子どもたちはどこにも救いを求めることができなくなる。



## 教育改革の動きと教師

脱学校論で知られるイリッチ(I. Illich)は、『脱学校の社会(Deschooling Society)』の中で、教師は、裁判官、イデオロギスト、医師の権限を一身に併せた「特別権力関係」の持ち主だと指摘している。

特別権力関係とは、刑務所などで、基本的な人権が、特別に制限されている状況を意味している。それと同じように、教室の中の子どもたちは、担任から、行動のしかたから考え方まで、規制を受けることになる。

また、イリッチと同じ流れをくむホルト(J. Holt)は、『21世紀の教育よこんには(Instead of Education)』の中で、学校と教師とを、大文字と小文字(Teacher & teacher)とに分けている。そして、伝統的な大文字の学校(School)では、「子どもが学ぶ内容をすべて管理し、教え込もうとする」から、そうした教師(Teacher)に指導されると、子どもたちは、命令されるのに慣れ、依頼心が強まるだけでなく、常に評価されているので、不安感が高まり、情緒の不安定さを招く。したがって、これからの学校(小文字のschool)は、権力的な性格を弱め、子どものためのサービス機関にならねばならない。そして、教師(小文字のteacher)も、「子どもを尊重し、信頼し、子どもを助ける人」に変身する必要があると言っている。

さらに、ベライター(C. Bereiter)は、『教育のない学校(School without Education)』の中で、ひとりの教師が、権威を持って読み書きを教え、その一方で、子どものサイドに立って、子どもの相談に乗るのは不可能に近い。したがって、知識や技術の伝達と子どもの世話を分離する形が望ましいと指摘している。

1970年に入ってから始まったこうした脱学校論の流れが、オープン・スクール(Open



School = 教室の壁を取り払い、オープンスペースを利用しながら教育する学校)やバウチャー制 (Vaucher = 教育切符、学習する機会を保証するが、それをどこで使うのか、親にまかせる制度、学校選択の自由を尊重する)、オルタナティブ(alternative = 選択の自由を大幅に認める学校)などの試みを生んだのは、周知の通りであろう。

しかも、欧米のフリースクールを取材した大沼安史氏の『教育に強制はいらない』などを読むと、こうした考え方が、点として散在する形であるにせよ、かなり拡がりを持って、欧米で実践されているのが分かる。

子どもたちの自主性を尊重したいという、こうした脱学校論の主張を批判するのは容易であろう。学校や学級、そして、教師をラジカルに批判し、否定しているものの、既存の学校に代わって、どういう教育を具体的に構想するかについての代案に乏しい。極論すれば、ユートピアを夢みている現代のドン・キホーテだときめつけるのも可能である。

しかし、脱学校論などというど、目新しいが、その主張をていねいに跡づけると、ルーツが予想外に古いのが分かる。1920年代に提唱された『児童中心主義の学校 (Child Centered School)』例えば、ダルトンプラン (Dal-

ton Plan)、ニールの学校 (Niel School)、ドクロリーの学校 (O. Decroly School)などを、当世風アレンジし直すと、オープン・スクールやオルタナティブスクールとなる。

これらの動きを要約すると、

- ① 学級集団の枠を柔軟にし、他の学年や学級との交流を積極的に勧める。
- ② 学級集団の中で、教師と子どもとの間の関係を、教師支配型から子ども主導型へと変え、特に、教師の役割に、指導や助言の性格を強める。

となろう。

しかし、こうした指摘が、欧米でのものであることに留意したい。なぜなら、欧米の教室は、日本の学級と比べ、学級をとりまく壁が柔軟で、学級王国というような印象が薄い。その欧米で、更に、教室を柔構造化しようという動きが目につく。それに反し、日本の学校では、教室の固定化が強いにもかかわらず、そうした傾向を是正しようという動きが乏しい。

もちろん、学級という枠はあっても、基本的には、子どもと教師との1対1の対応を大事にする欧米と比べ、日本の学級では、伝統的に、集団としての力の活用に重きを置いてきている。というより、歴史的に、学級あたりの子ども数が多いから、そうせざるを得なかったのかもしれないが、そうした背景はともあれ、学級王国的な学級経営のあり方にも、それなりの長所が存在するのは確かであろう。

しかし、従来の教育研究では、教室の中に科学のメスを入れる機会が少なかった。そのため、子どもにとって、学級が、どんな意味を持っているのかを検討したデータに乏しい。そこで、とりあえず、子どものサイドから、学級の姿を洗い出す調査を進めることにしたのが、今回の調査レポートである。

# 調査レポート 子どもにとっての学級

深谷 昌志 (奈良教育大学教授)  
湯井 康二 (豊能町立東ときわ台小学校教諭)

学級には、それぞれの雰囲気がある。暖かい感じの学級、とげとげした感じの学級……である。

そして、子どもたちは、短くとも、2年間は、同じ学級の中で、毎日、何時間かの生活を送る。しかし、子どもたちからすれば、自分の希望でなく、まったく機械的にどこかの学級に配属される。

それだけに、よい学級に入れれば楽しい毎日を過ごせるが、居心地のよくない学級に配

置されると、つまらない生活を送らねばならない。

子どもにとって、学級はどんな意味を持っているのか、アメリカでは、学級を選ぶ自由を、子どもあるいは親に与える試みが実施に移されている。日本でも、いずれそうした問題を検討する時期が来るのではないだろうか。こうした問題意識を踏まえて、学級のあり方を考えようとしたのが、本報告書である。

サンプル数 (人)

学年 \ 性	男子	女子	計
4年	129	116	245
5年	144	129	273
6年	159	139	295
計	429	384	813

## 調査概要

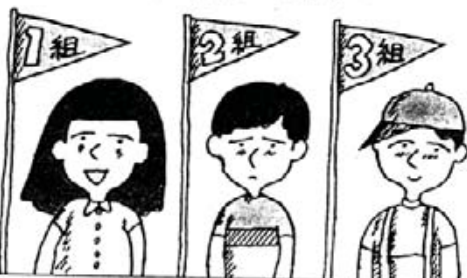
対象 ● 大阪近郊の小学4～6年生  
昭和55年11学級、56年21学級  
時期 ● 昭和55年9月、56年9月  
方法 ● 学校通しによる質問紙調査

## 要約

### ① 9割から2割

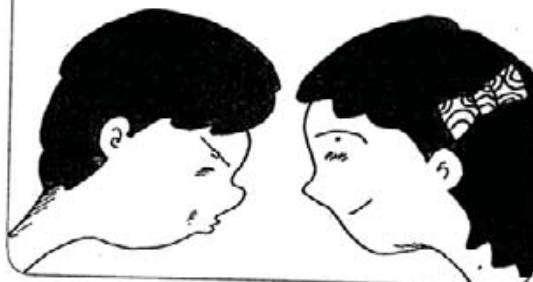
子どもたちの学級への充足感は、9割から2割まで。

学級差が大きい(図1・図9)



### ② 62%

今のクラスでよかったという声は62%にとどまっている(図2)



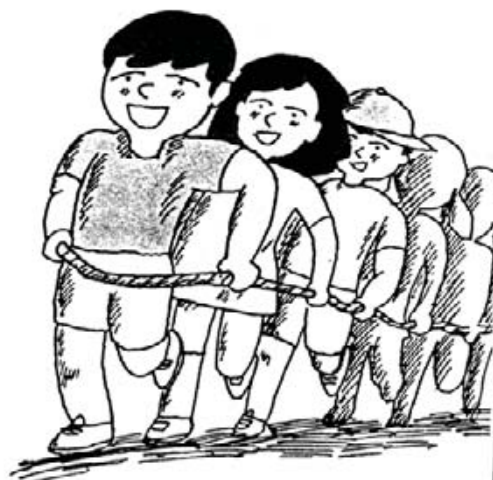
### ③ 52%から31%へ

4年生から6年生へ進むにつれて、学級に充足感を持つ子どもが減る(図5)



### ④ 教師から仲間へ

4年生から6年生へ進むにつれ教師中心の形から仲間主導型へ学級が変わっていく(表1・表2)



## 提言

クラスに充足感を持つ子どもの割合は、学級により、大きな開きを示した。9割以上の子どもから、うちの学級はよいと思われている学級も見られる反面、充足感が2割にとどまる学級もあった。

そして、そうした充足率は、教師のあり方によるところが多い。子どもは、所属する学級を選ぶことはできない。そうだとしたら、全員は無理としても少なくとも、半数、できたら、6割の子どもに充足感を与える学級運営を望みたいと思った。



# 1. 学級に対する充足感



## 学級への満足度

前述のような問題意識に基づいて、学級で生活している子どもたちが、どんな気持ちで毎日を送っているのか。その実態をつかむ調査を始めることにした。

しかし、学級を対象にした調査は、教室という密室の中に、科学のメスを入れることであると同時に、時には、子どもたちの担任に対する批判を表面化させることにも通じる。それだけに、調査依頼といっても、そう簡単に引き受け手を見いだせるとは思えない。そこで、知人を頼り、有志を募ったところ、11人の教師の協力を得ることができた。

そうして実施した調査の中に、図1のような結果がある。これは、「今の担任に受け持ってもらってよかった。あるいは今の学級に入れてよかった。」と思う子どもの割合を、学級

ごとに集計したプロフィールである。

結果を入手するまで、正直なところ、どんな数値が得られるか、見当がつかなかった。

「住めば都」のたとえの通り、学級での生活が長くなるにつれて、学級に対する充足感が増すのではとも考えられるし、悲観的な見方をすれば、そうは言うものの、この学級はつまらないと思っている子どもが、一定の比率を占めるのではとも考えられる。

しかし、経験的な見通しを言うなら、不満を持つ子どものタイプは学級により、異なっているが、どの学級も、おおむね6～7割の子どもが充足感を持つ反面、3～4割の子どもは、学級に不満を持っているのではないか。そして、学級や担任を支持する子どもが7割に近づけば、まとものよい学級で、それに



反し、支持率が6割を割れば、なにかと問題の多い学級になると予想していた。

結果は、図1に示した通りだが、学級に対する気持ちが、学級により、大きな開きを見

図1・クラスへの充足感

(%)

学級	今の担任になってよかったと思う (とても)	今の学級になってよかったと思う (とても)	学級担任について (教職年数・教科・学級経営の特徴など)
Ⓐ	85.7	88.4	25年 女 体育 生活指導のベテランで、態度や言葉使いにとっても厳しい。自主学習を中心に、自ら学ぶ態度の育成をねらいとしている。
B	79.5	75.3	13年 女 特別 どの教科も教科書にそって、ていねいに指導している。ひとりひとりを大切に学級経営。
Ⓒ	68.8	65.6	2年 男 体育 始業前、昼休みは必ず外に出て子どもと遊ぶ。「学級には常に笑いが必要」。
D	64.9	51.4	6年 男 算数 体力作りを一年の課題とし基本を大切に学習。脱線授業も多く、明るいクラス。
E	58.5	65.9	1年 男 算数 体育の不得意な子の多いクラスなので、教師が外に出て遊ぶ機会を作ろうとしている。
F	53.8	46.2	20年 男 社会 きちんとした学習態度を身につけ、確実なものをつくり上げていく指導。宿題やテストも多く学習の定着に注意を払っている。
G	53.8	64.1	35年 女 国語 豊かな創造力をモットーに自ら学ぶ姿勢を育てている。子どもの要求はすべて受け入れる。
Ⓗ	40.9	59.1	12年 男 体育 体力作りを中心になんでもやってみようというファイトマン。子どもたちを叱咤激励して共に学習している。
I	38.5	43.6	8年 女 音楽 子どもに対してはやさしく、ていねいに指導している。歌や笛を演奏している時は、クラスがひとつになっている。全体として我まよ。
Ⓙ	34.9	49.5	30年 男 理科 子どもの中にいっしょに入ることなく、常に教師と児童という距離をもって指導している。人情味ある叱り方をする。
Ⓚ	18.6	23.3	10年 女 社会 子どもの気持ちと遊離した形の叱り方をする。資料をもとに、自ら課題を発展させていく学習。

○は6年生

せているのに驚かされた。A学級のように、9割の子どもから支持されている学級もあれば、K学級の場合のように、支持率が2割の学級も認められる。

したがって、ひとくちに学級といっても、それぞれの開きが大きく、一般化しにくい印象を受ける。それと同時に、学級への帰属意識が、予想より低いのも、目につく傾向である。11学級のうち、過半数の子どもから、「この学級はつまらない」との声の出されている学級が4つを数えるだけでなく、残りの7学級にしたところで、5～6割台が5学級に達し、8割近い支持を得ているのは2学級にすぎない。

念のために、11学級の平均をとってみると、

- ① 今の学級でよかった 55.7%
- ② 今の担任でよかった 54.4%

となる。つまり、今の学級でよかったと思っている子どもが半数強で、残りの半数近い子どもは学級につまらなさを感じている計算になる。

この調査に協力してくれた先生方のために

補足しておくなら、これらの教師は、授業熱心で、むろん、平均をはるかに上回る力量の持ち主である。そうした先生方でも、子どもたちからの支持が、5割強にとどまったのは、やはり考えさせられるものを含んでいるし、この調査を、もう少し一般化して実施するなら、子どもからの支持が、5割を下回る可能性が強い。

そうした感慨はともあれ、図1の中で、もうひとつ気がつくのは、学級に対する満足度が、基本的には、担任に対する評価を密接に関連している事実であろう。つまり、図中の数値が示すように、教師に対する評価のよい学級では、子どもたちの帰属意識が高まり、逆に教師への評価が低下するにつれて、学級への不満も募るというパターンである。

したがって、図1を手がかりとするなら、学級に対する子どもたちの帰属意識は、基本的には、教師により規定されると考えられよう。そこで、図中の11人の教師が、どんなタイプなのかを探ってみた。

## 教師のタイプ

J学級の教師は、理科教育のベテランで、理科教材の開発では、X市を代表する教師のひとりである。放課後、教室の片隅で、大工道具を拵げながら、いくつもの教材を考案している姿を見かけることが多い。また、K学級の教師も、資料をもとに、子どもたちを追い込む形の社会科の授業では、Y市の中でも、何本かの指に入る実践家である。

2人とも、そうした意味で、熱心な教師であるのは確かだが、どちらかと言うと、子どもの中に飛び込むより、子どもから一線を画した形の学級経営を行っている。したがって、子どもとの遊離が目につくと批判する声もあった。

実力派だが、子どもたちの扱いに冷たさの

目立つ教師の学級で、子どもたちの帰属意識が低いのをみると、少なくとも、小学校では、子どもとの触れ合いが、学級運営にあたって、中心的な課題となると思わざるを得ない。

なお、H学級の担任は、体育専門の人らしく、学級対抗のドッジボールなどでは、熱心な指導を行い、昨年度も、この学級が学年優勝を果たしている。その他、昼休みや放課後、子どもたちの中に入って、ボール投げをしている教師でもある。それだけに、H先生は、子どもたちからの支持を、もっと得ていると思っていたらしく、そのため、支持率4割の結果を信じられないようであった。

そこで、この学級に例をとって、支持、不  
支持を分ける子どもたちの属性を分析してみ

た。それによると、H先生を熱心に支持しているのは、男子、中でも、スポーツの得意な子どもに限られていた。そして、女子やスポーツの苦手な子どもから、先生に対する不満が吐露されていた。

自分自身が体育が得意なので、つい、元気のよい子どもに目がいってしまい、内気な子どもの扱い方がわからない。そのため、そうした子どもが疎外されている感じになる。H

先生は、そういうタイプの子どもの心の内をくみ取れないようであった。

H先生と正反対なのが、音楽専攻のI先生の学級で、この学級では、女子の中に親衛隊のような担任支持派が見られるものの、男子の反発が強かった。合唱や合奏の時間が長く、それが、不満の種を作っている。こう見てくると、多くの子どもからの支持を得るのは、予想外に難しいという気がしてくる。



## どんな学級か

今まで触れたように、ひとくちに、学級といっても、それぞれによる違いが予想外に大きいことが明らかになった。

しかし、1回だけの調査から安易に結論づけるのは危険なので、昭和56年に、今度は21学級を対象として、子どもたちの抱く学級像を調べることにした。

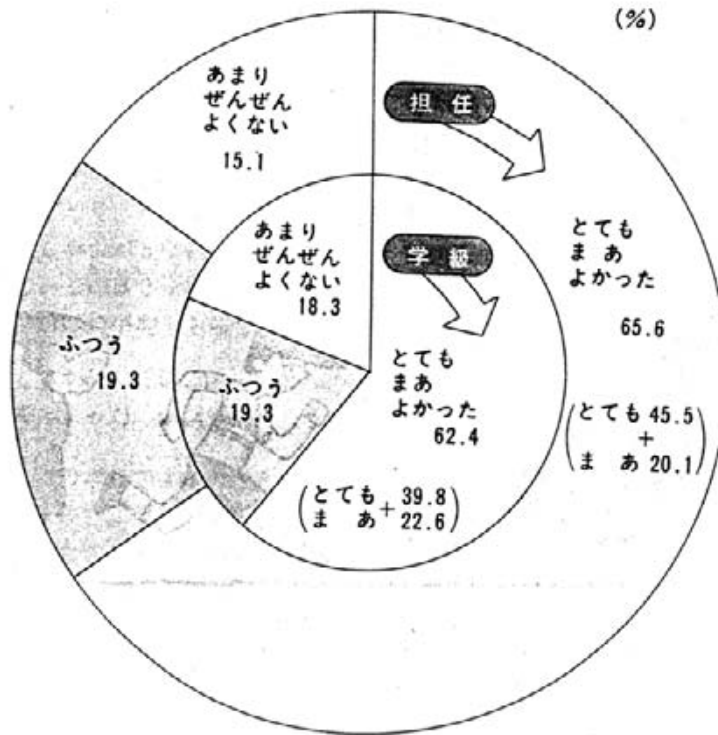
今回の調査も、子どもたちに、現在の学級や担任についての評価を尋ねる内容なので、一般的な形で協力を求めにくいため、知人を頼り、調査の主旨を説明して、調査に参加してもらう形をとることにした。

さっそく、調査結果の紹介に入ろう。21学級の個々の特性については、もう少しのちに触れることにして、まず、サンプル全体の反応を概観しておこう。

まず、今の学級、あるいは、担任になってよかったかについては、図2のような結果が得られている。前回の調査と同じように、学級に対する満足感と学級への充足感との間に、密接な関連が認められるが、そうした印象はともあれ、図2の中で目につくのは、学級または担任になって、「とてもよかった」と思っている子どもは4割前後にすぎず、それに反し、今の学級になって、つまらないと言っている子どもの割合が、2割に達している事実であろう。

学級の中には、40人からの子どもたちがいるのであるから、それらの子どものすべてから、「うちの学級はよい」と思ってもらうのが理想であろうが、そうはいうものの、学級に異和感を持つ子どもが何人か存在するのは

図2・今の学級・今の先生になってよかったか——



やむを得ないかもしれない。しかし、それにしても、2割近い子どもたちが、学級に不満を持つのは、あまりに、高い数値のように考えられる。

そうした感概はともかく、子どもたちに、あなたの学級は、どんな学級なのかを尋ねたところ、図3のような結果が得られた。上位の項目はともあれ、下位、つまり、「うちの学級はそうでない」の反応が興味深い。

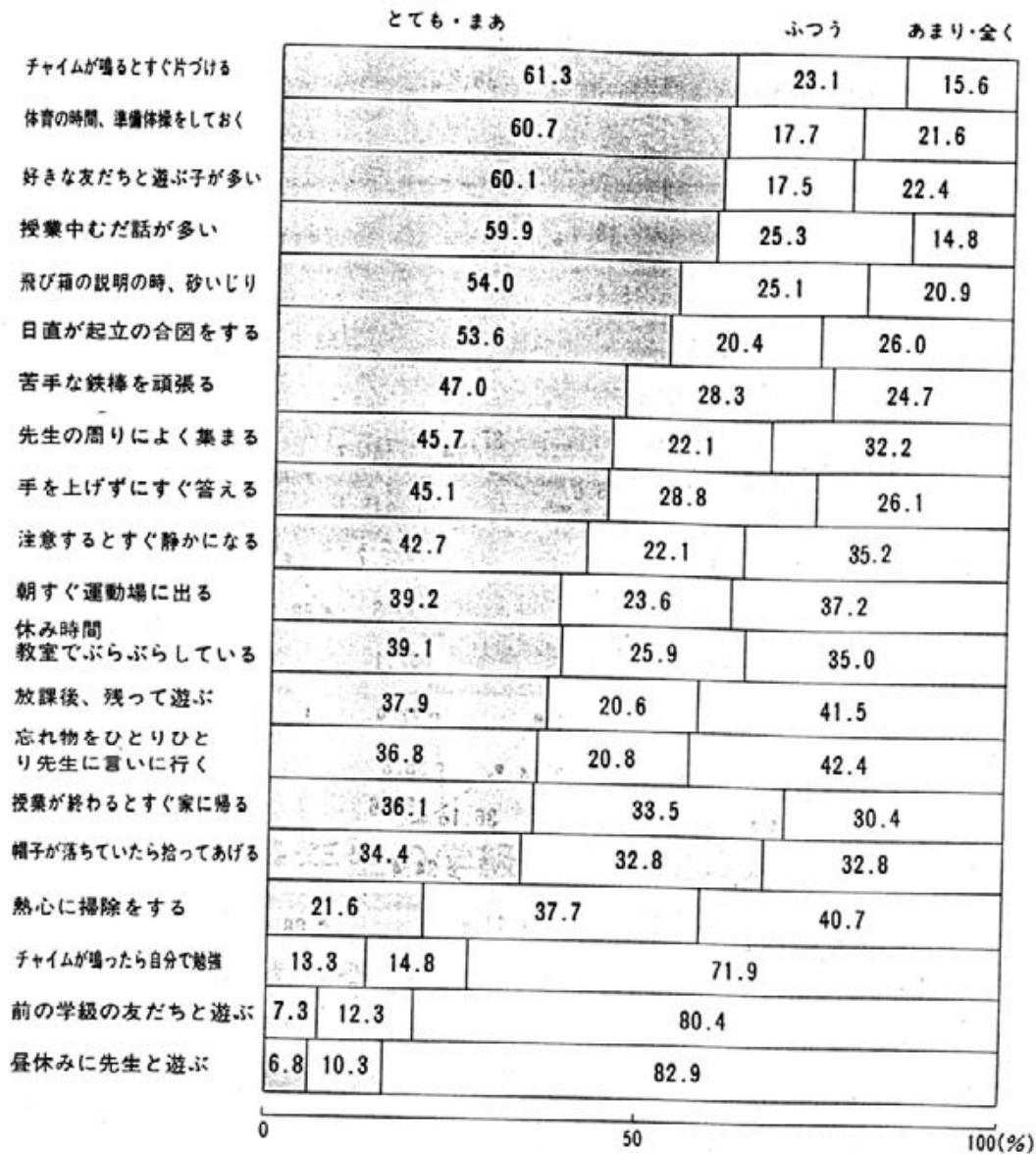
下位1位 昼休みに先生と遊ぶ

2位 休み時間、前の学級の友だちと遊ぶ

3位 チャイムが鳴ったら、自分で勉強

4位 熱心に掃除をする子どもが多い  
先生が相手になってくれない、遊ぶ相手は同じ学級の子どもに限られているなどが分かって、考えさせられる内容だが、それでは、子どもたちは、どんな学級を望んでいるのか。理想の学級を、実際の学級と対比させて示

図3・あなたの学級はどんな学級——



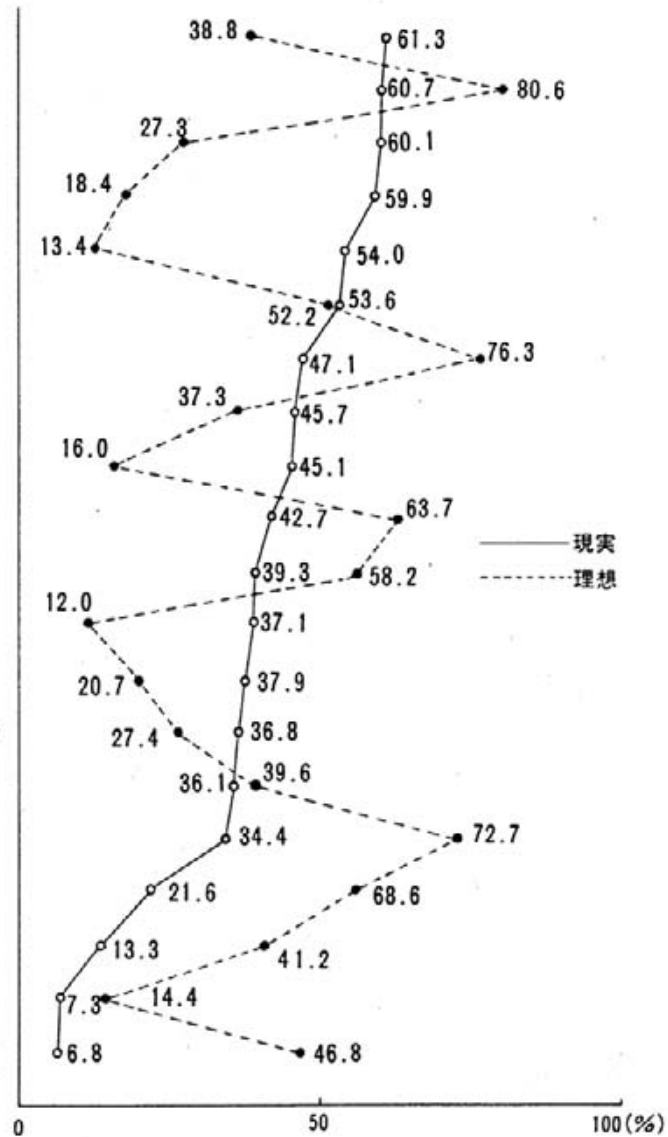
すと、図4の通りとなる。

	理想	現実
体育の時間、準備体操をしておく	81%	61%
苦手な鉄棒を頑張る	76%	47%
熱心に掃除をする	69%	22%
チャイムが鳴ったら自分で勉強	41%	13%
端的に言って、子どもたちは、ひとりひと		

りがよく自覚した行動がとれ、言われなくても、熱心に掃除をするような学級でありたいと思っている。しかし、残念ながら、すきがあると、掃除をさぼる仲間が多いというのが学級の実態となる。また、授業の時、むだ話をしない学級がよいのだが、騒がしい時が多いのが、今の学級という反応も見受けられる。

図4・今の学級とはいってみたい学級

- チャイムが鳴るとすぐ片づける
- 体育の時間、準備体操をしておく
- 好きな友だちと遊ぶ子が多い
- 授業中むだ話が多い
- 飛び箱の説明の時、砂いじり
- 日直が起立の合図をする
- 苦手な鉄棒を頑張る
- 先生の周りによく集まる
- 手を上げずに答える
- 注意するとすぐ静かになる
- 朝すぐ運動場に出る
- 休み時間教室でぶらぶらしている
- 放課後、残って教室で遊ぶ
- 忘れ物をひとりひとり先生に言いに行く
- 授業が終わるとすぐ家に帰る
- 帽子が落ちていたら拾ってあげる
- 熱心に掃除をする
- チャイムが鳴ったら自分で勉強
- 前の学級の友だちと遊ぶ
- 昼休みに先生と遊ぶ



注) 「とても」・「まあ」そう思う割合

## 2. 学級の学年差



### 4年生の学級と6年生の学級

ここで、もう一度、先ほどの図2へ戻ろう。  
サンプルをトータルとしてとらえると、図中

のプロフィールが示す通りだが、これを、学  
年別に統計し直すと、図5のような数値が得

図5・今の学級・今の先生になってよかったか——

		とても	まあ	ふつう・あまり・全然	(%)
学級	4年	51.8	15.6	32.6	
	5年	39.1	25.5	35.4	
	6年	30.9	25.4	43.7	
担任	4年	64.4	12.3	23.3	
	5年	41.7	25.1	33.2	
	6年	33.2	21.8	45.0	

2. 学級の学年差

られる。

どうしたことか、学年が上がるにつれて、今の学級でよかったと思う生徒が、4年生の52%から6年生の31%へと減ると同時に、今の先生でよかったという反応も、64%（4年生）から33%（6年生）へと、ほぼ半減している。

したがって、教師により学級差が生まれることも確かながら、その以前に 学年によって、学級に対して抱いている子どもたちのイメージが変わっている可能性が強い。

そこで、学級の実態を、もう少し、細かく、4年生と6年生とを対比させて示すと、図6の通りとなる。

図6・今の学級×学年差

体育の時間、準備体操をしておく

日直が起立の合図をする

好きな友だちと遊ぶ子が多い

チャイムが鳴るとすぐ片づける

授業中むだ話が多い

飛び箱の説明の時、砂いじり

注意するとすぐ静かになる

授業が終わるとすぐ家に帰る

手を上げずにすぐ答える

苦手な鉄棒を頑張る

休み時間教室でぶらぶらしている

帽子が落ちていたらすぐ拾ってあげる

朝すぐ運動場に出る

放課後、残って教室で遊ぶ

先生の周りによく集まる

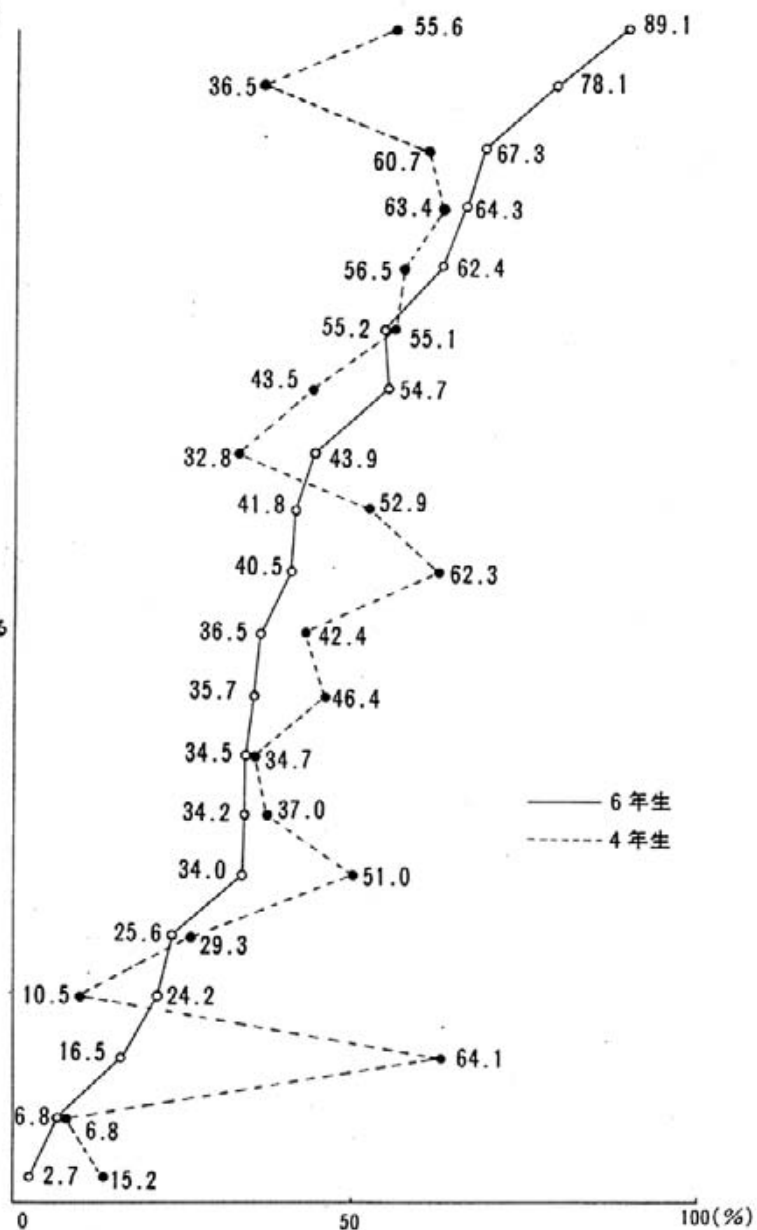
熱心に掃除をする

チャイムが鳴ったら自分で勉強

忘れ物をひとりひとり先生に言いに行く

前の学級の友だちと遊ぶ

昼休みに先生と遊ぶ



(注)「とても」「まあ」そう思う割合



それぞれの学年の学級を特徴づける項目を上位4位まで選んで示すと、

6年生

- ① 体育の時間、準備体操をしておく 89%
- ② 日直が起立の合図をする 78%
- ③ 好きな友だちと遊ぶ 67%
- ④ チャイムが鳴るとすぐ片づける 64%

4年生

- ① 忘れ物をひとりひとり、先生に言いに行く 64%
- ② チャイムが鳴るとすぐ片づける 63%
- ③ 好きな友だちと遊ぶ 61%
- ④ 体育の時間、準備体操をしておく 56%

となる。第1位を占めた項目が示すように、何かあると、子どもたちが、先生のところへかけよるのが4年生の学級だとするなら、子どもたちが、自分たちだけで、きちんと準備体操をしておくが、6年生の学級となる。つまり、教師が中心となり、その周りに、子どもたちが集まるのが4年生の学級であり、それに対し子どもたちの間にグループができ、その中である程度の自主性が芽ばえてくるのが6年生の学級なのであろう。

もっとも、子どもたちに、担任に対する評価を求めたところ、図7のような数値が得ら

れている。これを大別すると、

1. 学年を問わず、先生たちがめったにすることのないもの

- ① 外へ散歩に行く
- ② 休み時間に遊んでくれる
- ③ 予定を変え、体育をする
- ④ 子どもの頃の話をする

2. 4年生の担任の方がよくしていること

- ① 授業中冗談を言う
- ② けんかをした子どもを注意する

3. 6年生の担任の方がよくしていること

- ① 宿題をたくさん出す
- ② 相談にのってくれる
- ③ 掃除中きつく叱る
- ④ 給食をいっしょに食べる

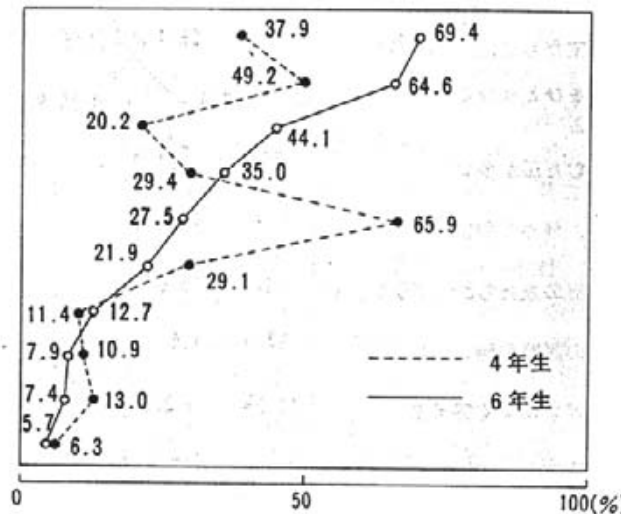
の通りとなる。

4年生の時は、先生ものんびり冗談を言いながら、授業を進めていく。しかし、6年生ともなると、勉強が難しくなるので、宿題をたくさん出すなど、先生の態度も変わってくる。そうした教師たちの姿勢の違いが、学級のあり方に、微妙な影を投げかけている可能性が強い。

なお、図8に、4年生と6年生たちが、そ

図7・あなたの学級の先生は――

- 宿題をたくさん出す
- 掃除中、きつく叱る
- 相談にのってくれる
- 給食中いっしょに食べる
- 冗談を言う
- けんかした子だけに注意
- 子どもの頃の話
- 体育の授業に変える
- いっしょに遊ぶ
- 散歩に行く

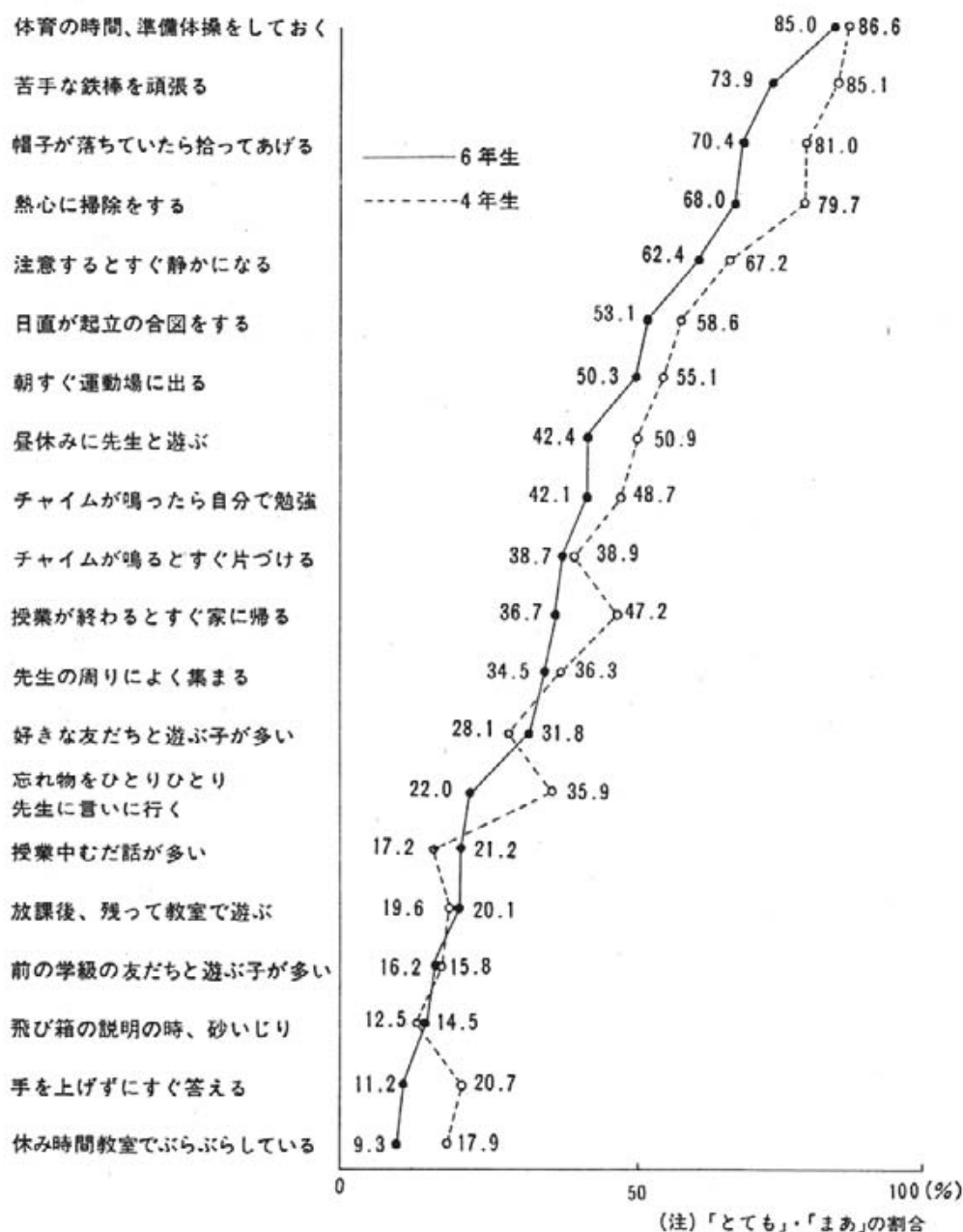


(注)「いつも」「ときどき」の割合

れぞれに抱いている理想的な学級像を示してみた。すでに紹介した図6では、4年生と6年生との間に、今の学級についての評価で違いが認められた。しかし、図8によると、4年生の方が、全体として、学級に強い期待を

抱いているものの、「先生が来るまでに、準備体操をしておく」あるいは、「苦手な鉄棒を頑張る子どもが多い」そして、「帽子が落ちていたらすぐ拾ってあげる子どもが多い」、「熱心に掃除をする子どもが多い」学級を望

図8・どんな学級に入りたいか×学年



んでいる。つまり、子どもたちひとりひとりが、しっかりとしていると同時に、心が優しく、そうした子どもが集まって、統制のと

れた学級をつくる。そうした学級のメンバーになりたいというのは、学年を越えた気持ちなのであろう。

## 学級差を掘り下げる

今まで、サンプル全体、そして、子どもたちの学年差に注目して、学級のイメージを考察してきた。しかし、昭和56年の調査が示唆しているように、4年、6年といっても、その学年なりに、学級による個性が存在している。

そこで、学級への帰属意識を、21学級全体について示すと、図9の通りとなる。「とても」に「まあ」を含めて、「今の学級になってよかった」と思う子どもの割合を示すと、図中の数値が示すように、94%の子どもから、この学級のメンバーになれてよかったと思われる学級もあれば、そう思う子どもが、わずかに3割程度の学級も認められる。

学級間に、こうした開きが存在するのは、すでに紹介した図1にも表れていた。したがって、この2つの調査結果を総合すると、学級により、子どもたちの気持ちに予想以外の大きな開きが認められるのは否定しがたいように考えられる。

そこで、同じ4年生の中でも、学級に対する満足感に開きが目立つ学級があるので、そうした背景を探ることにした。しかし、学級といっても、学校による違いも無視できないので、同じ学校の4年生の中で、子どもからの評価が著しく異なったA校の4年1組と2組、B校の4年1組と2組（組名はいずれも仮名）に例にとって、違いの生じた理由を考えることにした。

A校の場合、表1に示した通り、4年1組は84%が、学級に満足感を持っているのに対し、4年2組の満足感は50%にとどまっている。また、B校についても、1組と2組との間に、70%と47%と、満足感に23%の開きが

みられる。

表1は、そうした対をなす2つのペアについて、学級に対する評価が異なる項目を抜きとって要約した結果である。①の「担任の満足度」に例をとると、A校4年1組では92%が、担任に満足していると答えているのに対し、2組の満足度は41%となる。

しかし、表1は、数値が多く、読みとりにくいと思われるので、この中でも、特に、差の多い項目に着目してみよう。

### ① 1組の方が数値の多い項目

	A校	B校
1. 忘れ物を先生に言う	54%	28%
2. 担任に満足	51%	25%
3. 先生の周りに集まる	32%	32%

(1組の数値から2組を引いたもの)

### ② 2組の方が数値の多い項目

	A校	B校
1. 男女の仲がよい	24%	15%
2. 掃除をしないと叱る	20%	41%
3. 友だち思いの子どもが多い	14%	11%

これと同じような技法を使って、6年生のC校、D校のそれぞれ2学級を抜き出して要約したのが表2である。そこで、6年生についても、1組と2組との間で差の生じた項目を列举してみよう。

### ① 1組の方が数値の多い項目

	C校	D校
1. 朝すぐに運動場へ	95%	45%
2. よく運動する	35%	31%
3. 担任の満足度	34%	18%

### ② 2組の方が数値の多い項目

	C校	D校
1. 宿題が多い	37%	46%

2. 学級の学年差

- 2. 放課後、教室に残る 34% 3%
- 3. 休み時間、教室に残る 14% 29%

こうしてみると、4年生にとって、満足の  
できる学級と、6年生によい学級とが、違っ  
ているのが分かる。

つまり、4年生の場合、男女の仲がよい、  
あるいは、友だち思いの子どもが多いなどの  
クラスメイトの条件は、かならずしも、よい  
学級の条件と成り得ず、むしろ、「みんなが先  
生の周りに集まる」、「忘れ物があると、みん

図9・学級への帰属意識——今の学級になってよいと思うか——

学校・学年・組	とも・まあ思う			ふつう	あまり・全然 思わない	
	(%)	(%)	(%)		(%)	(%)
全 体	62.4			19.3	18.3	
4年 組	94.1				5.9	0.0
5	88.7				6.8	4.5
A校 4-1	83.8			8.1	8.1	
C 6-1	82.7			10.3	7.0	
5	76.5			8.8	14.7	
5	76.2			14.3	9.5	
D 6-1	74.5			15.4	10.1	
B 4-1	69.4			16.7	13.9	
6	66.6			15.4	18.0	
4	62.6			22.9	14.3	
5	62.0			23.8	14.2	
4	61.2			12.9	25.9	
5	54.3			31.4	14.3	
6	44.9			37.5	12.6	
D 6-2	50.0			27.5	22.5	
A 4-2	50.1			17.6	32.3	
5	47.3	7.9		44.8		
B 4-2	47.0			32.4	20.6	
6	46.0			35.1	18.9	
C 6-2	43.7	23.7		32.6		
5	41.7	25.0		33.3		
6	29.7	29.0		41.9		

なが先生のところに言いに行く」などの教師の条件の方が、学級に対する帰属意識を支えているように考えられる。

それに対し、6年生の学級では、教師の影は薄れ、「登校すると、運動場へ出ていく子どもが多い」あるいは、「暇があると、運動場で遊ぶ子どもが多い」などが、学級に対する満足感を支えるようになる。

したがって、大づかみにすると、「教師指導型」(4年生)から「仲間主導型」(6年生)への変化が、小学校中学年から高学年にかけての学級の移り変わりだと考えられる。

なお、こうした結果は、数量化II類を用い

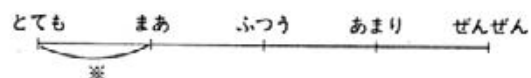
て、学級に対する満足感を尋ねた結果にも現れている。例えば、4年生の場合、「先生とよく遊ぶ」(4-①)「先生とよく話す」(2-①)などの教師との接触が、学級に対する満足感を高めているのに対し(図10)、6年生(図11)では「友だち思いの子どもが多い」(②-①)、「まとまりがある」(1-①)などの仲間のあり方が、学級への満足感を支えることになる。

したがって、教師としては、4年生頃まで、教師がひとりひとりの子どもに対応する形の学級経営が必要であろうが、高学年になるにつれて、学級の中に、子どもたちの集団を作

表1・4年生の学級

学級の満足度	A校4-1				B校4-1			
	4-2	4-2	4-2	4-2	4-2	4-2	4-2	4-2
① 担任の満足度	83.8	>	50.0	69.5	>	47.1		
② 先生の周りに集まる	91.9	>	41.1	75.0	>	50.0		
③ 忘れ物をした時ひとりひとり言いにくる	61.1	>	29.4	63.9	>	32.3		
④ 忘れ物をした時ひとりひとり言いにくる	86.5	>	32.3	86.5	>	58.9		
④ 起立の合図	59.4	>	35.3	13.5	>	2.9		
⑤ 掃除をしないとときつく叱る	62.1	<	82.4	18.9	<	60.0		
⑥ 先生の言いつけをよく守る	5.4	<	20.5	11.2	<	38.2		
⑦ 男女仲のよい	5.4	<	29.4	5.4	<	20.5		
⑧ 友達思いの	25.0	<	39.4	21.6	<	32.2		
⑨ ぼうしを拾ってあげる優しさ(理想)	86.1	>	76.4	88.8	>	67.8		
⑩ よく勉強する	48.1	<	61.8	16.2	<	21.2		
⑪ よく運動する	75.7	>	57.6	85.7	>	68.8		
⑫ 苦手な鉄棒でも頑張る子どもが多い	94.6	>	75.8	72.9	>	33.3		
⑬ 休み時間、教室でぶらぶら	27.0	<	41.2	21.6	<	50.0		
⑭ 放課後残って先生と遊ぶ	42.8	<	55.9	11.2	<	37.4		
⑮ 同じ学級の仲よしと外に出よう	86.5	>	76.5	86.5	>	61.8		
⑯ 同じ学級の仲よしと一緒に帰ろう	94.6	>	79.6	89.2	>	57.6		
⑰ 下校後も同じ学級の子どもと遊びたい	81.1	>	76.4	66.7	>	60.6		

注) 差のあった項目のうち、※「とても」・「まあ」思うと答えた子どものパーセント



2. 学級の学年差

らせ、その集団の力を作用させて、学級を動かして行く。つまり、直接統治の形から間接統治

の形へ、学級経営のあり方を変えていくのが望ましいと考えられる。

表2・6年生の学級

(%)

学級の満足度	C校6-1	6-2	D校6-1	6-2
	82.0	> 44.7	74.4	> 50.0
① 担任の満足度	89.7	> 55.3	59.0	> 41.0
② 先生の周りに集まる	25.0	< 39.5	28.2	< 67.5
③ 宿題の多い	57.9	< 94.8	46.2	< 92.3
④ 友達のことと相談にのってくれる	68.2	> 44.8	51.2	> 42.5
⑤ 今の学級は手を上げずにすぐ答える人が多い	32.5	< 41.7	23.1	< 37.5
⑥ 放課後教室に残って遊ぶ	2.5	< 36.9	35.9	< 38.5
⑦ 休み時間教室でぶらぶら	10.0	< 23.7	26.3	< 55.0
⑧ 朝すぐ運動場へ出る	97.4	> 2.6	84.6	> 40.0
⑨ 組の子どものフルネームを知っている	87.5	> 70.2	100.0	> 87.5
⑩ 男女仲のよい	36.9	> 10.8	42.1	> 37.5
⑪ よく勉強する	47.4	> 15.8	31.6	> 25.0
⑫ よく運動する	77.0	> 42.1	78.9	> 47.5
⑬ どんな問題でも発表する人が2~3人いる	15.8	> 5.3	21.1	> 33.3
⑭ その人は勉強が得意	84.6	< 97.3	65.8	< 92.5
⑮ 昼休みドッジボールをしようと先頭になる人が1~2人いる	35.4	< 97.4	18.9	< 26.3

